

障害のある子どもの ICT を活用した国際理解教育について

服部 晃*¹ 小林憲一郎*² 加藤友仁*³ 山田英貴*⁴ 日々野清高*⁵

岐阜県では平成16年度から総合教育センターを拠点として、学校間総合ネットの遠隔学習機能（TV会議システム）を活用した海外との交流活動を実施している。これまで、時差の少ないオーストラリアの学校と県立学校との間で、生徒の情報発信能力と英語力の向上を図る目的で実践してきたが、今年の2月には聴覚に障害のある岐阜聾学校の生徒と、やはり多様な障害のあるオーストラリアの学校の生徒との間で、岐阜女子大学の担当者及び岐阜県教育委員会情報処理研修室の担当者のサポートにより、TV会議システムによる遠隔協同学習を行った。引き続き今年度も実施を計画している。それらの成果と課題について発表する。

<キーワード> 遠隔協同学習, 特別支援教育, 国際理解教育, ICT, TV会議システム

1. はじめに

特別支援教育は障害や発達につまずきのある児童生徒の一人一人が、その障害の状態、特性及び発達段階等に応じたきめ細かな教育を受けることにより、持っている能力を最大限に伸ばし、積極的に自立し社会参加できることを目指している。

岐阜県内には、盲学校1校、聾学校1校、養護学校（知的障害、肢体不自由、病弱）12校があり、障害の状態や発達段階に応じた教育内容・方法により、手厚く、きめ細やかな教育を行っている。

今回、ICTを活用した国際理解教育に意欲的に取り組んだ岐阜聾学校¹⁾は、3歳から5歳までの教育を行う幼稚部から、小学部、中学部、高等部と2年間の専攻科課程を持つ、県内唯一の聴覚に障害のある幼児児童生徒を対象にした学校である。

岐阜聾学校では、早い時期から補聴器を使って「音」の存在に気付かせたり、「ことば」の力をつけるための丁寧な指導や、人と関わる力を育てるための様々な体験的な活動などを行い、障害を克服して社会参加・自立に向けての専門的な教育を行っている。

特に、豊かなコミュニケーション能力を身に付けるために、「生き方づくり（心）」、「学び方づくり（意欲）」、「体力づくり（体）」を

学校あげての信頼・協調・責任の基に推進している。

特色ある教育活動の例として、中・高等部の生徒による「和太鼓演奏」は、地域社会での交流活動から、昨年度は中国・上海市での国際交流活動にまで発展し、熱烈歓迎を受け、児童生徒及び教職員は確かな手ごたえを感じている。

また、情報活用能力の育成とコミュニケーション活動の増大を図る目的で進めている「情報教育」は、学校長をはじめ教職員の熱の入れ方にも並外れたものがあり、様々な教育活動の場面で活用し、幼児児童生徒の中に着実に浸透してきている。



「岐阜聾学校における情報教育」

*¹ HATTORI Akira : 岐阜女子大学文化創造学部

*² KOBAYASHI Kenichirou : 岐阜女子大学文化創造学部

*³ KATO Tomohito : 岐阜県立岐阜聾学校

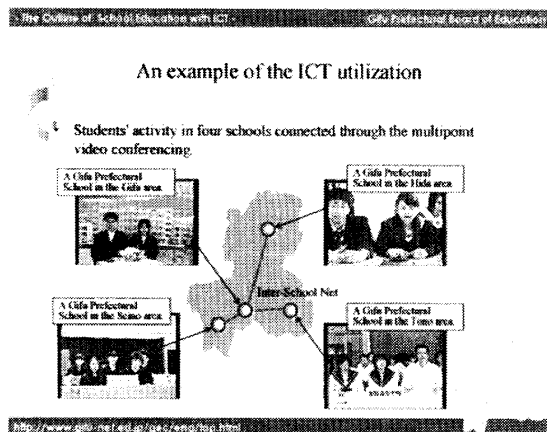
*⁴ YAMADA Hidetaka : 岐阜県教育委員会研修管理課

*⁵ HIBINO Kiyotaka : 岐阜県教育委員会研修管理課

2. いつでも会える海外の友達支援事業

岐阜県では平成14年5月に全ての県立学校を結ぶ学校間総合ネット（1Gbps）が稼動し、平成17年度には全ての小・中学校が学校間総合ネットに接続される予定である。

「人材の共有」「情報の共有」「行動の共有」を合言葉に、この学校間総合ネットを活用した様々な活動が実施されている。



いつでも会える海外の友達支援事業はそれらの活動の一つで、事業の概要は以下のようである。

1 目的

岐阜県総合教育センター²⁾を拠点として学校間総合ネットの遠隔学習機能（TV会議システム）を活用した海外との交流活動を実施し、生徒の情報発信能力や英語力の向上を図る。

2 事業内容

時差の少ないオーストラリアの学校と TV会議システムを活用した交流を実施する。

- ・実施校：実施を希望する県立学校のうち28校（3年間に全ての県立学校で実施）
- ・交流内容：公開授業、協同テーマ研究、合同授業、文化交流の実施など

3 事業計画

(1) 実施方法等

- ① 交流希望調査票により、調整を図り実施する。
- ② 実施時間は1校当たり2時間×28校、総時間数56時間分
- ③ 実施期間は、平成16年度内とする（単年度の予算執行）

(2) 交流手続きの流れ

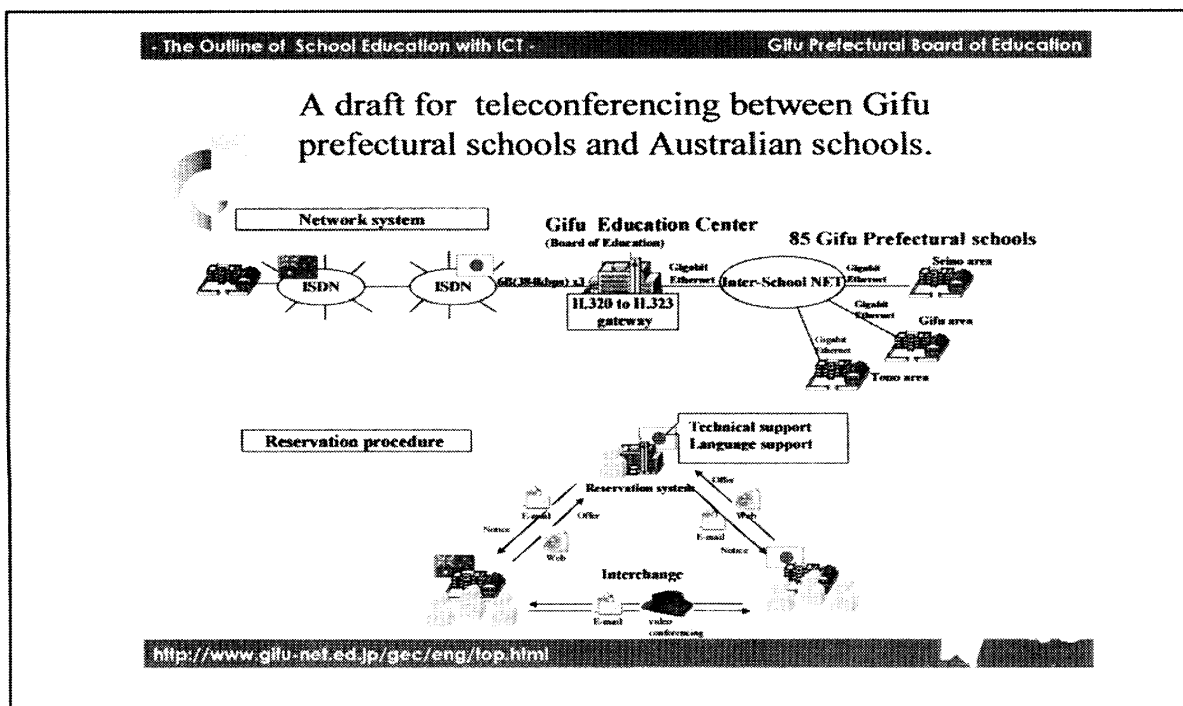
- 5月：交流希望調査
6月：交流実施確定通知
7月～：申し込み及びホームページ上への掲載

4 事業効果

- ・顔を見ながらの直接的な交流を体験することにより、国際社会の一員としての自覚を育成する。
- ・英語を使用する機会を増やし、実践的コミュニケーション能力を育成する。

5 事業実施に係る経費

県教育委員会が負担する。



TV 会議システムを活用した遠隔協同学習を進めるには、当該校の時間調整から学習内容の検討、学習者の意識の高揚にいたるまで担当者の負担は相当なものがあり、ましてや海外との交流となると、その意義は認めても進んで実施しようとは考えないのが普通である。今回の教育委員会の提案は、各学校及びその担当者の負担を極力軽減し、生徒の学習機会を拡大して国際理解教育を積極的に推進しようとするものであった。

岐阜県内の高校には、オーストラリアの学校と何らかの交流を進めているところが15校程あり、E-mailでの交流から、生徒が相手の国にでかけてホームステイをしながら海外研修を行うものまで、活動の内容は様々である。これらの高校の中には今回の事業に意欲を示し、早速とその準備に取りかかるところもあった。

しかし、初期の段階で実際にこの事業に何らかの関心を示したのは、81校中の12校であった。事業の目的と内容をいろいろな機会を捉えて説明するとともに、ICTを活用した国際理解教育を、先導的に推進することに協力的な学校を選んで依頼することや、意欲的な学校には年度内に複数回の実施を認めるなど、事業計画を少し修正することも検討された。

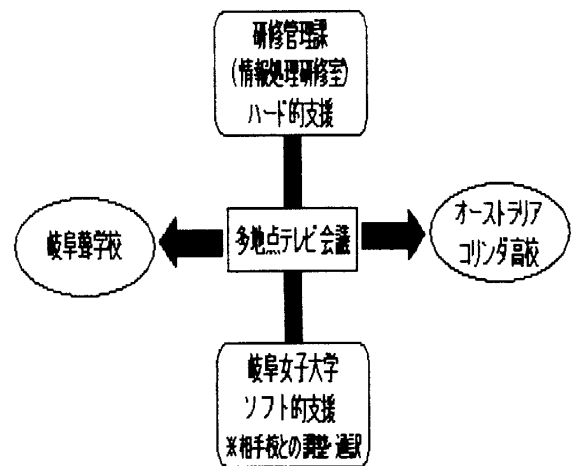
また、遠隔協同学習を円滑に進めるために、オーストラリアと日本の教育のいずれにも詳しい教官がいて、学校間総合ネットに接続している岐阜女子大学が間に入って支援することになった。

平成16年8月6日には、県立高校2校と私立高校1校、そして岐阜女子大学がオーストラリア・クイーンズランド・ブリスベンのコリンダ高校とTV会議システムを活用した遠隔協同学習を行った。この様子は、岐阜女子大学を会場にして開催された「21世紀の教育を考える会」³⁾の国際理解教育分科会で、多くの出席者も観ることができた。このことによって、各学校の教員はICTを活用した国際理解教育が極めて平易に進めることができると認識した。

3. 岐阜豊学校とコリンダ高校とのTV会議

障害や発達につまずきのある児童生徒が、

国を越えて互いの学校生活を見聞することの意義は大きいと考えて、双方の学校長をはじめ関係者の理解を得ながら「障害のある子どものICTを活用した国際理解教育」の計画を進めた。



以下は、実際に行われた交流の概要である。

コリンダ高校とのTV会議交流

(いつでも会える海外の友達支援事業)

1 目的

- ・海外との交流体験を通し、英語に関心をもつとともに積極的に学ぶ。
- ・自分たちの住む地域、学校について英語で紹介する。
- ・意見交流を通して、相手の学校の様子や高校生の考えを知り見聞を広める。

2 交流相手校

オーストラリア コリンダ高校⁴⁾
(Corinda State High School)

3 交流日時

平成17年2月25日(金)
9時50分～10時40分

4 参加生徒

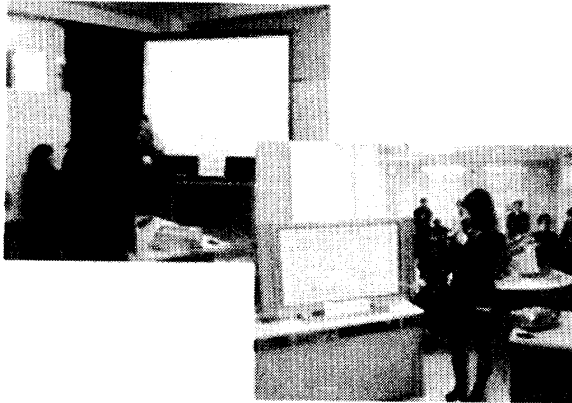
- ・コリンダ高校(Special Education Class) 障害をもつ高校生42名の中から交流を希望する生徒(障害種は多種)
- ・岐阜豊学校
高等部1～3年生 16名
専攻科 2年生 1名 計17名

5 交流の計画・準備

- ① 交流の内容と紹介文の作成(参加生徒全員)
- ② 紹介文の英訳(英語科の授業)
- ③ 情報の収集、発表資料の作成(情報科)

の授業)

- ④ 英文紹介（スピーチ）の練習
- ⑤ 岐阜女子大学とのTV会議交流（試行）
平成16年11月2日
- ⑥ 当日の進行・サポート
- ⑦ 交流の感想のまとめ



6 当日の交流内容

- ① 始めのあいさつ（代表生徒）
- ② 岐阜聾学校からの紹介
 - ・岐阜県の紹介
 - ・岐阜市の紹介
 - ・岐阜聾学校の紹介
- ③ コリンダ高校からの紹介
- ④ 意見交流
双方から自由に質疑応答
- ⑤ 交流の感想を発表する
- ⑥ 終わりのあいさつ（代表生徒）

4. 国際交流の感想

画面に大寫しの、初めてみる光景を前にして話しかけることは、生徒でなくても緊張するものである。生徒達の一所懸命さがその場に居合わせたものの一体感を生み、そのことが相手に伝わり、次第に距離を超え言葉を超えて、まさに心と心が通い合う状況に変わっていく様相を目前に見ることができた。

国際理解教育を進めるには、言葉が大きな鍵になることは誰もが認めることであるが、言葉だけではない。むしろ言葉を意識し過ぎることの方が問題である。お互いが分かり合おうとすること、分かってほしいと真剣に伝えることが、互いの心が通じ合う最大の鍵であることを、そこにいた全ての教育者が感じたことである。双方の学校長が、互いの生徒

の活躍ぶりを褒め称え、意気投合して今後の交流を誓い合った。

交流を終わって、岐阜聾学校の生徒の感想は、次のようであった。

面白かった	2人
参加してよかった	6人
勉強になった	9人
面白くなかった	0人
よく分からなかった	0人

生徒が書いた感想には次のようなものがあった。

- ・今まで国内の学校と交流してきたが、違った新鮮さがあった。
- ・英語を話すことは難しいけれど、コリンダ高校の生徒に伝えられてよかった。
- ・交流して、もっと英語を知りたいと興味がわいてきた。
- ・コリンダ高校はいろいろなコースや部活動があって、すばらしい学校だと思った。
- ・オーストラリアへ行きたくなった。
- ・もうすぐ卒業するけれど、最後にいい経験ができた。

5. 今後の課題

初めての試みは、失敗しないようにという双方の周到の心配りと準備により、生徒達や職員の感想からも分かるように、多くの成果があった。しかし、いつでも「会える海外の友達支援事業」が目指すものは、終わって「ほっとした」と言って胸をなで下ろすようなものでなく、もっと気軽に、普段のままの姿で協同学習を行うようにならねばならない。

そのためには、この活動を継続することと、他の障害を持った児童生徒にも ICT を活用した国際理解教育を進める必要がある。

6. 参考資料

- 1) 岐阜聾学校
<http://school.gifu-net.ed.jp/gifurou-s>
- 2) 岐阜県総合教育センター
<http://www.gifu-net.ed.jp/gec/index/html>
- 3) 21世紀の教育を考える会
<http://www.gijodai.ac.jp/21th/>
- 4) コリンダ高校
<http://www.corindashs.eq.edu.au>